

第一章 授業に臨む前に

一 国語科の目標と課題

(一) 国語科の目標

私たちは言葉によつてものを考え、言葉を使って人と交流する。日本人である私たちが思考やコミュニケーションの手段として母語、つまり日本語に関して、意識的な学習を行うのが国語科の教育である。国語を学んで知識を広げ、思考や認識を深め、しなやかな感受性を養い、良好な人間関係を築く。言語生活を豊かにすることにより、人生をみずみずしく豊饒なものにする。それが国語科教育の目指すところではないだろうか。

そう考えてはいても、実際、高等学校の国語科において、指導者がどのような目標をもち、どんな学習指導をすればよいかとなると、簡単な話ではない。

「英語が話せるようになる」「難しい数式の解法が分かる」など、漠然とはあつても「できるようになること」のイメージをもちやすい他の教科に比べて、国語の学習は、どんなことができるようになるのか、何を目指しているのか、生徒にとって判然としないところがある。ほとんどの高校生は、日本語を話したり聞いたり、読んだり書いたりすることに大きな不自由を感じてはいない。一方で、国語という教科が苦手な生徒は多く存在する。つまり、生徒が生活に必要なと認識する国語力と、国語科教育が目標とする学力(言い換えれば、それは社会が求める国語の学力でもある)との間には、

大きな差異があるのだ。その差異に気付かせ、より高い国語力の獲得を期待して学ばせることが、困難ではあるけれども大切なことなのである。

母語の学力が全ての教科の学力に関わることは、一般に認識されている。先述したように、私たちは母語を使って知識を学び、思考を深め、他者とコミュニケーションを図るからである。読書は知識を獲得し感性を養うのに欠かせないものだが、私たちが読書に親しむのも、まずは母語を通じてである。そう考えると、国語科の学習は、人間形成の根幹にも関わる大切なものだと言える。

指導者はこのような認識と誇りをもち、生徒にそれを実感させるような授業の在り方を考えるべきであろう。一時間の授業において、生徒に何ができるようになってほしいのか、どんな力を身に付けてほしいのか、指導者は自らの言葉で語り、授業の目標を生徒と共有することが大切である。この一時間の学びが生徒の豊かな人生につながることを願いつつ、学習指導は明解な到達目標に向かって進めたい。

二〇一三年度から年次進行で実施されている高等学校学習指導要領(以下学習指導要領)では、国語科の目標が以下のように記されている。

国語を適切に表現し、的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

この目標をより具体化・細分化したものが、学習指導要領に記されている指導事項である。詳細については後ほど触れることになるが、指導事項に示されている学力は、読み書きに必要な基本的な国語力（漢字・文法・語彙などの理解・運用能力）と言葉の美しさやリズムを感じる力、そして身に付けた基本的な国語力を使って記録や要約、説明、論述、討論などを行う能力とまとめることができる。国語科の授業において目指すのは、生徒のこうした能力を伸ばし、より高い水準において学び、考え、表現し、交流し合うことができるようにすることだろう。

こうした国語の力は、授業中だけでなく、生活全般を通して磨かれ高められていくものだが、その中心となつて生徒の言語能力の育成を目指し、直接かつ計画的に指導するのは国語科の役割だと言える。したがって、高等学校国語科の指導者は、その役割と責任の大きいことを認識し、指導に当たる心構えをもつようになりたい。

（二）学習指導要領と言語活動の充実

学習指導要領では、言語活動を通じて国語科の指導事項（生徒に身に付けさせたい力）を指導することが明確になっている。記録、要約、説明、論述といったさまざまな言語活動が強調されているのはどうしてだろうか。

二十一世紀に入り、時代や社会は大きく変容し、そこに生きる私たちも日々急速な変化を迫られている。教育には、こうした時代や社会の変化を敏感に捉え、対処することが求められる。

変化の激しい環境にあつて大切なのは、既存の知識や情報を蓄えるばかりでなく、それらを臨機応変に活用し、足りないものを更に

獲得していく力だろう。知識や技術の革新が絶え間ない社会では、学び続け、既習の知識や技術を更新し続ける姿勢や、パラダイム転換を可能にする柔軟な思考力が重要となる。

学習指導要領には、生徒の思考力、判断力、表現力等を育む観点から、教科を問わず言語活動の充実に配慮することが記されている。この学習指導要領に大きな影響を与えたのが二〇〇三年のPISA調査だった。日本の十五歳は、論理的思考力に基づく記述力・論述力に課題を抱えていることが明らかとなり、こうした学力を養っていくことが、国語科のみならず、全ての教科等を通じての課題であると認識された。その後各方面の努力もあり、二〇一二年の同調査では記述力や論述力も含めた学力の回復・向上が顕著となったが、二十一世紀型の学力とも言えるこのような力は、今後いつそう伸ばしていく必要があるものだろう。

国語科の学習について言えば、単に指導者から教授される知識を吸収するだけでなく、獲得した知識や技術を使って、より深く考えたり、物事の真偽や正誤を判断したり、自らの意見や意思を表明したりする力を育成することが求められている。教師が説明し、分からせて、暗記させるという従来の知識注入型の教育から、生徒自身が問題解決を考え、結論を導き、自分の意見として表現する体験・プロセス重視型の教育への質的転換を迫られている。その方法として、言語活動の充実がクローズアップされているのである。

（三）一斉授業の功罪

ところで、高等学校の国語科教員となり、今この「手引き」を開いている皆さんは、高校時代、どのような国語科教育を受けてきた

だろうか。自らが学習指導を行うに当たっては、誰しもが、まず自分が受けてきた国語の授業を思い浮かべるだろう。その時、熱心に作品の解釈を述べ、板書していた指導者の姿と、黙々とそれをノートに書き写していた自分の姿を思い出す人も多いのではないかと思う。チョークを手にした指導者が一人で語り、生徒がひたすらそれを聞くという授業形態は、これまでごく一般的なものであったからだ。

こうした一斉授業は、明治以来今日まで続いている学習指導形態の一つである。一度により多くの生徒に知識を注入することができるので効率がよく、生徒の知的水準の均質化を図ることもできる。しかしこの効率化された指導形態が、「国語嫌い」を生み出してきた可能性も否定できない。生徒自身が考えたり感じたりする必要がほとんどなく、主体的に学ぶことができないからである。生徒が積極的に学びたくても、疑問や意見を口にできるチャンスはまれにしかない。何も考えなくても、板書を写して答案に再現すれば、よい成績を収めることができる。これでは、もともと読むことや書くことが好きな生徒ほど、国語の授業に興味・関心をもてなくなるのではないだろうか。

無論、指導者は生徒の興味・関心を喚起するために、説明や発問に工夫を凝らしてきた。しかし、指導者と生徒との一对一の受け答えを基本とする授業形態では、全員に発言の機会を与えることは物理的に難しく、一つの発問を全ての生徒の学びにつなげることは至難の業だ。教室に一人の指導者と四十人の生徒がいることを前提として、全員に主体的な学びをさせたいと願うなら、指導者から生徒への知識注入型の授業形態や、指導者と生徒の一对一の関係を基本とする授業形態からのパラダイム転換を図る必要がある。言語活動

の充実は、そのヒントとなりうる。

コラム①【言語活動】

授業における言語活動とは、ペア音読、話し合い、といった一時間ごとのばらばらな活動を指すのではない。身に付けさせたい力を育成するための、単元を通じたひとまとまりの活動を指すのである。したがって、古典作品において、筆者の美意識を捉えて現代と比較することが単元の目標ならば、そこに至るまでの音読、語釈、文法学習なども言語活動の一部として位置付けられるものである。指導者は、これらの学習が指導者による一方的な知識の注入ではなく、生徒の主体的な学習活動となるよう工夫する必要がある。

(四) 生徒の相互交流による学習活動へ

指導者から生徒へ、一方的に知識の教授が行われる一斉授業の短所を解消するためには、少人数で授業を行うことが有効である。一人の指導者を数人の生徒が囲む、大学のゼミのような授業であれば、個々の生徒は主体的に取り組まざるを得ない。

しかし現実的には、一人の指導者が四十人の生徒を相手に授業を行う場合がほとんどだろう。こういう場合、指導者対生徒の間答ではなく、生徒相互のコミュニケーションを重視した学習活動を設定することにより、生徒が主体的に学ぶ授業とすることができる。つ

まりグループ学習を行うのだ。学習指導要領の「言語活動例」には、グループで行う活動がいくつか例示されている。

隣同士で教科書を交互に音読する活動から、数人のグループで解釈や意見を交流し合う活動まで、グループ学習といってもさまざまな目的や形態があるが、生徒同士の学びを交流させることにより、生徒の発言機会が増え、活動が活発になり、思考も活性化される。知識を広げ、思考力や判断力を磨き、表現力やコミュニケーションの力を高める学習が期待できる。

無論、生徒の相互交流による学習には短所もあるし、こうした学習が不向きな場合もあるだろう。何より、グループを作れば相互交流やグループ学習が始まるわけではない。指導者は、グループで行う学習活動の内容や目的を明確にして生徒に伝え、理解させることが必須であるし、学習活動の成果に対して評価も行わなくてはならない。活動中は、学習が適切に行われるよう援助したり、指示を与えたり、活動を促進したりする技術が求められる。時間や内容に関するルールや制限を設ける必要もあるだろう。このように、生徒の相互交流による学習では、指導者は知識の教授者ではなく、学習活動のコーディネーター（調整者）やファシリテーター（促進者）としての力を発揮する必要がある。

一斉授業と生徒の相互交流による学習活動、それぞれの長所・短所を理解した上で、生徒の主體的な学びを実現するよう授業の形態を工夫したい。

二 教育課程と指導計画

(一) 教育課程と年間学習指導計画

各学校には、年度当初に作成される「学校経営案」があり、その中に「教育課程表」が掲載されている。「教育課程表」は、在籍する生徒が三年間でどの教科等を何単位学習するかを記載したものである。

三年間の見通しを記したこの「教育課程表」に従って、「年間学習指導計画」をつくる。「年間学習指導計画」とは、単元ごとの指導と評価の計画の概要を、年間における全単元についてまとめたものであり、作成すると、生徒に一年間でどのような力を、どのような段階を踏んで身に付けさせていくのが明確になる。以下に「年間学習指導計画」に記載すべき項目を記しておく。

- ・概要（教科、科目、学年、単位数、教科書、補助教材、指導者）
 - ・科目の目標（学習指導要領に示された目標）
 - ・評価の観点及びその趣旨（観点到別に記す。国語科の場合は、「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の五観点）
 - ・年間に指導する単元と学習内容（実施する学期・月、単元及び学習内容、言語活動、教材、配当時間、評価の観点、評価規準、評価方法、進捗状況、反省等）
 - ・年間配当時間、各学期ごとの学級別実施時間、年間実施時間
- 「年間学習指導計画」の作成に当たっては、当該科目の指導事項を、一年間で全て指導できるよう計画を立てる必要がある。また、よく練られた「年間学習指導計画」によれば、単元案や授業案がつくりやすいものだが、適切な「年間学習指導計画」を作成するには時間がかかる。前年度中に、教科会等で検討しながら、作成を進め

ておくのが望ましい。

(二) 単元の指導計画

年間学習指導計画に従って単元の指導計画を作成する。作成の手順は、①生徒の実態把握、②単元の目標の設定、③言語活動と教材の選定、④単元の評価規準の設定、⑤評価方法の設定となる。

①生徒の実態把握は、一年の初めに行うだけではない。各単元に入る段階で、その単元の目標を設定するためによく検討する必要がある。これから学習しようとする単元は、生徒が関心をもちやすいものか、生徒にとって関心のあるどんな話題と関わりがありそうか(興味・関心の方向から)、この単元で扱う指導事項について、生徒は今までに学んだことがあるか、あるとすればどの程度身に付けているか(指導事項に関する習熟状況から)、この単元で使えそうな言語活動について、生徒は経験しているか、どの程度習熟しているか(言語活動に関する経験値から)など、実態把握もいろいろな観点からしてみるとよい。授業展開のヒントが見えてくることもある。

②単元の目標は、学習指導要領の「指導事項」に即したものとす。一単元につき、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のうち一領域を指導する。①の実態把握に基づき、取り上げる指導事項の文言に沿った形で、ふさわしい目標を設定する。

③言語活動は、指導事項を指導するのにふさわしく、かつ生徒が取り組みやすい活動を選択する。②で設定した目標を達成するのに、どのような活動が適当かを考え、その活動が生徒の力に合っているかを検討した上で、魅力的な活動を選択するのがよいだろう。

④単元の評価規準は、単元の目標に沿った形で、評価の観点ごとに設定する。「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」のいずれか一点と、「関心・意欲・態度」「知識・理解」の計三つの観点ごとに、評価規準を定める。評価規準は、単元の目標を具体化したものと考えてよい。単元の目標に照らして、その実現状況が「おおむね満足できると判断される」生徒の具体的な姿を言葉で表したものである。

⑤評価方法は、評価規準に基づき、評価したい学力に対応していることが大切である。基本的な学力である「知識・理解」については、客観テスト(真偽法、多肢選択法など)によっても評価することができ、発展的な学力を含む「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」については、客観テストのみで評価することは難しい。こうした能力を評価するには、近年「パフォーマンス評価」が推奨されている。「パフォーマンス」とは、自分の考え方・感じ方といった内面の精神状況を、動作や言語や書画などによって表現すること、あるいは表現されたものを言い、国語科においては、例えばレポートやエッセイ、脚本、朗読、プレゼンテーション、ダイベートなどが考えられる。こうした課題(パフォーマンス課題)を与えて遂行させ、そのパフォーマンスの質によって評価するのがパフォーマンス評価であり、発展的な学力を捉える妥当性(評価したい力を評価しているか)の高い方法として、今後広まっていくことが予想される。

パフォーマンス評価を行う際に大切なことは、評価方法の信頼性(誰が評価しても同じ結果になるか)を高めることである。客観テストが信頼性の高い評価方法であるのに対して、パフォーマンス評

価は、適正な基準づくりをしなければ、評価者によって評価が大きく分かれることになり、信頼性に乏しい評価になりかねない。この基準づくりとして関心を集めているのが「ルーブリック（評価指針）」である。

ルーブリックは、評定尺度と内容を記述する指標から成り立っており、指導者・生徒双方にとって段階的な目標を示すものとなる。例えば、詩の読解の単元の最後に、「作者の伝えたいことは何か。またそれを伝えるためにどのような工夫をしているか。適切な根拠を示して自分の考えを述べなさい」というパフォーマンス課題を設定した場合、以下のようなルーブリックを考えることができる。

評価基準	評価
作者が伝えたい内容を、適切な根拠を示してまとめ、表現の工夫（韻律、言葉の選択、繰り返しなど）が、その内容とどう関わって効果を上げているかを説明することができる。	3
作者が伝えたい内容を、適切な根拠を示してまとめ、表現の工夫（韻律、言葉の選択、繰り返しなど）に触れて、詩の特色を述べることができる。	2
作者が伝えたい内容を、適切な根拠を示してまとめることができる。	1

ルーブリックの作成には、複数の指導者と生徒たちが参加することが望ましい。ルーブリックの作成によって学習目標が明確になり、

生徒はそれを自己評価の指針にすることができるようである。一方で、ルーブリックは、生徒のパフォーマンスを評価していく中で、より適切な形に修正していく柔軟なものであることが望ましい。実際の評価場面において、指導者や生徒が事前に予測しなかったようなパフォーマンスが現れることも多いからである。

（三）各時の指導計画

単元の目標を踏まえて、各授業時間における目標（身に付けさせたい力）を、生徒の具体的な姿として設定する。学習内容については、生徒が適切な言語活動を行い、目標とする力を身に付けられるように工夫する。各時の評価規準は、各時の目標に照らし、「おおむね満足できると判断される」生徒の具体的な姿をイメージして、評価の観点ごとに設定する。評価方法については、授業中の発表や活動の観察、ワークシートやノートの記述の点検、確認、分析等を、評価の観点に応じて適切に選択する。なお、生徒による自己評価・相互評価は学習活動の一環であり、指導者が行う評価とは区別する。

◆参考資料◆

- 川本信幹『魅力ある国語の授業を創る』東京書籍 二〇一〇年
- 町田守弘編著『実践国語科教育法』学文社 二〇一二年
- 田近恂一・鳴島甫編著『国語科教育法研究』東洋館出版 二〇一三年
- 田中耕治『新しい「評価のあり方」を拓く―「目標に準拠した評価」のこれまでとこれから―』日本標準 二〇一〇年

コラム②【教材研究】

町田守弘は、教材を研究し、発問・指示を考える手順として、次の三段階を設定している（『実践国語科教育法』）。

- (一) 一人の大人の読者として教材と向き合う
一人の大人の読者として自分の読みを行う。感銘を受けた所、疑問点などを明確にし、研究書などを見て疑問を解決しておく。
- (二) 目の前の生徒の現状を鑑みて到達目標を定める
生徒の現状を日頃からよく観察し、生徒にふさわしい到達目標を熟考して定める。
- (三) 到達目標に達成させうる発問・指示を考える
生徒が出してくる答えを想定して、その後の展開まで考えておく。(一)(二)の作業に十分時間をかければ、発問・指示の内容はおのずと決まってくる。

(一)の段階の重要性については言うまでもないだろう。教材を精読し、研究史をひもとき、疑問点について調べ、作品を通じて作者が伝えたかったことは何だろうと考え、自分はどこどこに感銘を受けたかを振り返る……このような作業は、ほとんどの指導者が授業前に行っている。教材の読み込みによって作品に対する理解を深めておくことは、よい授業を行う上で欠かせないものだ。指導者が作品に感銘を受けたり、価値を見出したりすることなしに、生徒の関心・意欲が高まることはない。

しかし、(一)のみを教材研究と捉えるのは不十分である。(二)以上に大切なのは、その教材を使って何を生徒に学ばせるかを明確にすることである。また、目の前の生徒の学習段階に応じて、どのような目標設定をするかを考えることである。一つの教材は多面的な価値をもっているものだが、その中で何を学習させるか、言い換えれば何を扱わないかを吟味し、単元の目標に照らして、学習内容の精選を図らなければならない。指導者は、その作品について知っていること、気付いたこと、感銘を受けたことなどについて、なるべく多くを生徒に伝えたいと思うものだが、単元の目標を常に意識して、生徒に理解させること、身に付けさせること、(涙をのんで)割愛することを、それぞれ整理しておくことが大切である。

ここまでの作業が十分できていると、必要な発問や指示がどのようなものであるか、おのずと見えてくることだろう。

◆参考資料◆ 町田守弘編著『実践国語科教育法』学文社 二〇一二年